

**平成 27 年度中部支部大会報告**

—悠活のスメ—

支部長 大森裕實

(愛知県立大学)

平成 27 年度 JACET 中部支部大会(第 31 回/2015)は、愛知県教育委員会及び名古屋市教育委員会の後援を得て、2015 年 6 月 20 日(土)に南山大学(名古屋キャンパス)で予定どおり開催されました。

本大会テーマは「豊かなコミュニケーション力を育む『ことば』の力」「Exploiting Potentialities of 'langage' in order to Enhance Profound Communication” に設定

し、6件の個人研究発表に加えて、第一 Featureの特別講演では、昨年3月まで東京大学でグローバルコミュニケーションセンター長を務めた高田康成氏(名古屋外国語大学教授)が「行動派の回想と展望」と題する講演を行ない、東大グローバルコミュニケーション研究センター設立の裏側を射程に含めた話が聴衆を惹きつけました。また、第二Featureのシンポジウムでは、「社会が求める英語力と大学で涵養する英語力のインターフェイス」と題して、パネリストにメディア同時通訳プロの袖川裕美氏(愛知県立大学准教授 2015.10～)、池田年穂氏(慶應義塾大学名誉教授)、豊田昌倫氏(京都大学名誉教授)を迎え、小職が司会兼講師を務める形で、長年気になりながら実現できなかったテーマを中心にすえた、興味深いパネルディスカッションができたと思っております。この内容は、本年度刊行する『JACET中部支部紀要』第13号(2015.12)に掲載されますので、参加できなかった会員諸氏はそちらを参照してください。

ところで、本年度の支部大会は、他学会との重複日程を避けて、6月第三土曜日に開催しました。例年の開催日程とは異なるにもかかわらず、75名の参加者に恵まれました。会場校の南山大学では快く、真新しいフラッテンホールをはじめとする諸施設を提供していただき、支部大会運営幹事として、同校の鈴木達也氏及び浅野亨三氏が手抜かりのない大会運営を可能にしました。また、テキスト出版の金星堂、松柏社、成美堂、南雲堂(五十音順)に洋書取扱Asano Booksを加えた5社による展示も見ごたえがありました。い

**目 次**

平成 27 年度中部支部大会報告 大森裕實	1 頁
<u>講演会報告 1</u> 高田康成 氏 「行動派の回想と展望： 『なんたってグローバル』」 木村友保	2 頁
<u>講演会報告 2</u> 茂呂雄二 氏 「パフォーマンス心理学： 遊びと模倣に基づく新しい発達の考え方」 佐藤雄大	4 頁
<u>講演会報告 3</u> 横川博一 氏 「外国語運用能力の自動化プロセスを探る—授業実践と基礎研究のインターラクシオン」 藤原康弘	6 頁
<u>研究会報告</u> 待遇表現研究会	7 頁
<u>会員著書紹介 1</u> 『日・英語談話スタイルの対照研究』 安達理恵	8 頁
<u>会員著書紹介 2</u> 『よくわかる社会言語学』 吉川 寛	9 頁
事務局より	10 頁

ずれの皆さまにも、改めて感謝申し上げます。

さて、本稿の副題に掲げた「悠活」は、総務省や産業労働省の提唱する「ゆう活」の音声的響きと、悠々自適ならぬ「悠々知的」活動を意図して、小職が造語したものです。実は、本大会には久しぶりに丹羽義信氏（名古屋大学名誉教授）の姿もありました。ご高齢となった現在でも、体調が許す限りは学会に必ず参加されます。年々増加する日常の校務や雑務に翻弄されている私どもの眼には、同氏が悠々自適の生活を送っているように映ります。しかし、それはおそらく誤解であって、同氏が校務繁多の現役時代にあっても、JACET や LET 等の教育系学会活動にも熱心に取り組まれた事実を知る人は多いでしょう。本学会顧問の田中春美氏（南山大学名誉教授）についても同様のことが言えます。すなわち、大学教員にとっては、日常の繁忙業務にどれほど悩まされようとも、悠々知的生活を見失ってはならないという範例を、幸いにも、すぐ近くに戴いているということではないでしょうか。

最後に、本稿を閉じるに際して、一言申し添えます。大学英語教育学会 (JACET) の個人年会費は現在 9,000 円であり、他の人文系学会と比較して、決して安いとは言えません。また、国際大会（全国大会）に参加すると、別途参加費を納めねばなりません。「その割には会員個人へ還元するところが少ない」と言って退会した人を知っています。なるほど一理あります。しかし、視点を転じてみてください。中部支部の活動だけとっても、6月の年次支部大会、10月の秋季定例研究会、12月の講演会、2月の春季定例研究会があり、講演会を除いて、それぞれに研究発表の機会が保証されていま

す。また、年次刊行物の『JACET 中部支部紀要』に論考を發表することもできます。会員諸氏がそれらを十二分に活用して、これからの大学英語教育の改善・発展のためにご貢献くださることを切に願います。「悠活」はそれを推奨する Key Word です。

### 講演会報告 1

**2015 年度中部支部大会**

**「行動派の回想と展望：**

**『なんたってグローバル』**

**高田康成**

**(名古屋外国語大学教授)**

**2015 年 6 月 20 日**

**(於 南山大学)**

「グローバル」ということばは最近少しマイナスに取られがちだが、グローバル化は現実の姿であり、我々も向き合う必要がある。こう高田康成氏は切り出した。そして、結論的に現実がグローバル化しているならば、英語教育の面でも徹底的にグローバル化すべきであると主張する。その前提として、留学を取り巻く大きな変化に注目する必要がある。1985年のプラザ合意以降、変動相場制に変わり、たとえばドルと円の交換レートに変化が生じた。それまでは1ドルが360円であったのが、150円ほどになった。これで一気に留学は楽になった。

この変化を前置きとして、日本における「留学」環境の変化を概観した。「近代化」の時代、つまり明治維新の頃から官費派遣留学が始まり、夏目漱石もその1人で英国に留学している。国力が高まると、日本は帝国主義に走り、アジアを中心に海外からの留学生を受け入れた。その後、日本は高度経済成長の時代を迎え、「国際化」の時代

となった。日本からは公費留学が一般的となり、国のみならず県や民間の中にも、さらに外国の留学制度も日本人の海外留学を支援するようになる。同時に日本の経済成長が驚異の目で見られたため、海外からの留学生も増えた。その結果、「国際交流」といえば、留学生をどのように受け入れるかがその中心的話題となった。1995年頃になると日本は「グローバル化」の時代に入った。派遣留学の資金と期間や受け入れ留学生にも多様性が生まれ、日本人の海外在住の機会も増えた。こういう時代の変化に対応するために、早稲田大学(2004年)や上智大学(2006年)に「国際教養学部」が登場し、日本人学生と留学生との間の「共通言語」は英語であるという認識から英語で授業が行われるようになる。

さて、以上の変遷過程の中で、東京大学ではどのような推移が見られたのだろうか。「近代化」の時代、東京大学には多くのお雇い外国人教師が英語で講義をしていた。ラフカディオ・ハーンがその1人である。ただし、その頃、東大には依然として「洋学校」に過ぎないという批判があり、それに応えて、当時の総長職に当たる大学総理の任にあった加藤弘之は、「現在は英語で講義をしているが、これは本意ではなく、将来は教師も教材も授業も日本語で行うつもり」というような趣旨の発言をしている。そして、実際ラフカディオ・ハーンの後任として夏目漱石が東大で教えるようになっ

た。「国際化」時代は、一般社会がそうであったように東大にも「留学生教育センター」が設置されている(1960年)。

「グローバル化」時代にはどんなことが行われたか。高田氏は、大阪大学で1976年から5年半教鞭をとり、1982年から7年間は東北大学で、そして1989年に東京大学教養部(駒場キャンパス)に着任し、2015年3月まで「東大のグローバル化」に貢献した。だが氏が最初に直面したのは、東京大学では英語教員と体育教員の増員はないという問題であった。リスニングを大教室で行う、1クラス60人いる教室でリーディングを教えるという中でライティングの授業は敬遠される傾向にあった。そういう中で文系、理系を問わず、英語学習の根本を教える(大綱化の)ために、従来の訳読中心の授業から脱皮する自前の「英語I」のテキスト、『Universe of English』を作成した(1993年)。続いて短期留学制度を確立し(1995年)、蓮見総長の時には、総長の特命でベセトハ(Beijing, Seoul, Tokyo, Hanoi)4大学フォーラムの設立に尽力し、アジアの4大学の連携協力を目指した(1999年)。2000年からは英語部会(部員40名)の主任として、英語教育には次の二つを意識して従事した。(1)負荷がかかることをやらせる。(2)英語教育外注論には反対。

現在の科学の発達を考える時、近い将来wearable 端末がごく一般的になると思われる。同時に自動翻訳機もさらに高度にな

<b>南雲堂の英語テキスト</b>	
多読とライティングの『総合時事英語テキスト』で放送英語の捉え方をマスター!	
<b>Better Reading, Better Writing with NHK WORLD NEWS</b> 『NHKワールド・ニュースで学ぶ日本と世界の姿』	
▶ B5判・本体 2,000円・全 28章・Review Test 有	
視覚から理解する英文法! サブテキストにも最適!!	
<b>English Grammar</b> 『ビジュアル英文法』 黒川裕一著	
▶ B5判・本体 1,200円・全 20章・各章 2頁・本文/TM 2色	
異文化総合: 海外で学ぶ、働く、異文化を理解する	
<b>Let's Get Out of Japan!</b> 『英語で世界に橋を架けよう!』	
川村義治/Gavin Lynch 著 ▶ B5判・本体 1,900円・全 15章	
資格: 基礎から始める TOEFL iBT® 対策の決定版	
<b>TOEFL iBT® Basics</b> 河野麻子・Chris Valasek・金沢昌代・岩本千子編著	
▶ B5判・本体 1,900円・全 15章	
世界の不思議な法律から比較文化理解を深める総合英語	
<b>Funny Laws in the World</b> 『世界おもしろ比較文化』	
石井隆之・岩田雅彦・梶山泰克・Joe Cluncl 著 ▶ B5判・本体 1,700円・付録有	
〒162-0801 東京都新宿区山吹町 361 TEL: 03-3268-2311 / FAX: 03-3269-2486	
E-mail: nanundo@post.email.ne.jp / URL: http://www.nanun-do.co.jp	

り、簡単な日常会話であればその翻訳機で十分用が足せる時代になると予測できる。しかし、今後も高度なライティングは不可能である。そのために「ライティング」中心のパラダイムを予測し、『First Move』というアカデミックライティングの本を作成した（2003年）。その延長線上にライティングセンターの設立（駒場ライターズ・スタジオ）があり、ALESS（Active Learning of English for Science Students—2007年）や ALESA（Active Learning of English for Students of the Arts—2013年）の開設がある。その途中で、グローバルコミュニケーション研究センターが設立され、そのセンター長に就任した。

以上の経験の中で、高田氏は、グローバル対応の課題として以下の4点を考える必要があると結論づけた。

(1) 英語だけで教えようと、一部英語を使って教えようと、今後の英語教育では「英語で何か専門的な科目を教える」ことが必要である。

(2) グローバル人材を生み出すためには、全員を対象とするのではなく、能力のある学生、または好奇心旺盛な学生を選別し、集中的に英語教育を施すべきである。

(3) カリキュラム・デザインがまだグローバル化に対応できていないという現実を認識し、早急に対応策を考えるべきである。

(4) 留学も今や交換留学が一般的である。海外から来る留学生に対応する授業、また留学から帰ってきた学生（還流学生）に対応する授業の在り方を考える必要がある。

筆者に関して言えば、(1)(2)(4)にはすでに気づいていたが、(3)はまだである。今後この問題を具体的に考えていかねばと考えている。この Newsletter の読者のみなさんはいかがか。

木村友保（名古屋外国語大学）

## 講演会報告 2

### 2015年度秋季定例研究会

「パフォーマンス心理学：遊びと模倣に基づく新しい発達の考え方」

茂呂雄二

（筑波大学大学院）

2015年10月24日

（於 中部大学名古屋キャンパス）

秋季定例研究会でご講演いただいた茂呂氏は現在の日本心理学会を代表する学者の一人であり、常に新しい可能性にチャレンジされている学者としても知られている。今回は近年茂呂氏が熱心に取り組まれている Fred Newman、Lois Holzman の「パフォーマンス心理学」を紹介いただき、英語教育と結び付け、最後には茂呂氏自身に取り組まれているパフォーマンス活動（All Stars Tokyo）の紹介もしていただいた。

私は10年以上前からヴィゴツキー心理学の分野で連絡を取らせていただいている茂呂氏に秋季定例研究会の講演を依頼したのは『人はなぜ書くのか』（1986）という著作がある氏に来ていただいて英語教育におけるライティング指導に何らかの示唆を与えていただけるのではないかと考えたからだった。しかし茂呂氏からいただいた講演テーマは「パフォーマンス心理学」がメインとなっており、少し戸惑ったのが正直なところだった。

「パフォーマンス心理学」とは、「人間の行為は実験室では研究できない」という考えのもと1970年代以降心理学の分野で現場を対象とした研究が展開される潮流が生まれたが、パフォーマンス心理学もその文脈に位置づけられる。特にこのパフォーマンス心理学は人間の心理発達は個人に還元

できるものではなく、社会的状況における「実践」、「活動」、「パフォーマンス」で発達するものであるという考えのもと、演劇のような実際のパフォーマンス活動を行い心理的発達の促進、あるいは治療を研究し、現在ニューヨークのイーストサイド・インスティテュートで 1980 年代から実践されてきている。

この「パフォーマンス心理学」の核になるのがヴィゴツキー心理学で、ヴィゴツキーの洞察に基づく人間の「行為」には分節化される以前の原初的な可能性があり、それは他者との社会的なやりとりで形作られていくという考えに支えられている。特に人は「遊び」において「自然に」普段とは違った「自己」になれることや限界をこえたようなことをやってのけるというヴィゴツキーの観察に彼らの「パフォーマンス」概念が依拠しているところが大きい。このような「パフォーマンス」が人間に対して持つ可能性の研究は茂呂氏が 30 年前書いた『人はなぜ書くのか』と関係ないように感じられるかもしれないが、その『人はなぜ書くのか』においても氏はヴィゴツキー心理学をベースに文字以前のなぐり書き（つまりパフォーマンス）を対象に取り組んでいて、「行為」がもつ可能性を研究対象としている問題意識は通奏低音のように脈打っていることがわかり、私自身が抱いた

講演テーマに対する疑問も今回の講演を聴くことで答えを見つけることができた。

実はこのパフォーマンス心理学を異色の心理学者 Fred Newman と立ち上げ、彼亡き後現在もパフォーマンスによる社会的セラピーを継続して実践している Lois Holzman は、旧姓 Lois Hood で、1970 年代に言語習得の縦断研究としては草分け的な存在であったコロンビア大学の Lois Bloom のもとで学び、彼女と共にいくつか共著を持つ言語発達の研究者でもある（詳しくは Lois Holzman (2009). *Vygotsky at Work and Play* (茂呂雄二訳『遊ぶヴィゴツキー』) に書かれている)。

茂呂氏が講演の中で様々な例や学説を採用しながら、このパフォーマンス心理学の紹介を行っていたが、講演後読ませていただいた Lois Holzman の *Vygotsky at Work and Play* の扉に掲げてあったワークショップ劇に登場する「ヴィゴツキー」が語る以下のセリフが多くのことを語っているようにも感じた。

We must not make things stand still in order that they might be studied.

佐藤雄大 (名古屋外国語大学)

成美堂 2016 年		新刊のご案内	
Intermediate Faster Reading –New Edition–	1,900 円(税別)	World Wide English on DVD Volume 1 –Revised Edition–	2,500 円(税別)
Reading Success 1	2,000 円(税別)	World Wide English on DVD Volume 2	2,500 円(税別)
Science Updates	1,900 円(税別)	AFP World News Report 3	2,500 円(税別)
Two Sides to Every Discussion	1,900 円(税別)	VOA News Plus	2,400 円(税別)
Life across the Waves	1,900 円(税別)	Meet the World 2016 –English through Newspapers–	2,000 円(税別)
Let's Read Aloud More!	2,200 円(税別)	World of Wonders Inspiring the Future	1,900 円(税別)
Read Well, Write Better	2,000 円(税別)	Hello, English –English for Teachers of Children–	2,400 円(税別)
New English Master	1,900 円(税別)		
The Ultimate Approach for the TOEIC® Test	2,200 円(税別)	<b>株式会社 成美堂 SEIBIDO</b> 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-22 TEL 03-3291-2261 / FAX 03-3293-5490 URL <a href="http://www.seibido.co.jp">http://www.seibido.co.jp</a> e-mail: <a href="mailto:seibido@seibido.co.jp">seibido@seibido.co.jp</a>	
Listening Explorer for the TOEIC® Test	1,300 円(税別)		

### 講演会報告 3

#### 2015 年度講演会

「外国語運用能力の自動化プロセスを探  
る—授業実践と基礎研究の  
インターアクション—」

横川博一  
(神戸大学)

2015 年 12 月 12 日

(於 愛知大学名古屋校舎)

2015 年度、12 月講演会にご登壇いただいた横川博一氏は、日本の心理言語学の分野を牽引する代表的研究者であるとともに、ご所属の神戸大学の英語教育を統括しつつ実践なされている教育者でもある。さらに中高の英語教科書の作成や英語辞書の編纂、さらに英語学・言語学辞典の項目（やはり心理言語学分野！）の執筆など、さまざまな形で日本の英語教育界や研究界を支えられてもいる。今回のご講演は氏の上記の背景を余すことなく表された内容であったように思う。

本講演は 1) ご自身の英語の学習経験と、その経験に基づく授業実践、そしてその試行錯誤のお話があり、次に 2) その実践から発想なされた研究のお話し、最後に 3) 上記の 2 点をふまえて、外国語教育研究、SLA 研究における心理言語学的、脳神経科学的視点の重要性、彼の言葉を借りれば「インフラ整備」を訴えるまとめの部分に分けられる。

まず 1) のパートにおいて、筆者が大変感銘を受けたのは、氏の飾らない人柄と教育に対する熱意である。氏は大学院生時、自身が初めて国際学会で発表なされたときに、英語使用の自動化が十分になされていなかったため、大変な苦勞をなされたことを率直に語っておられた。このような経験

は日本で中高大と教育課程を経た、いわゆる「純ジャパ」の大学教員の多くは同様の経験をされたことがあると思う。しかし「英語教員」という立場上、このような苦い経験を数名のインフォーマルな場ではなく、多数の聴衆がいるフォーマルな場で話すのは大変勇気がいることではないだろうか。

また氏は自身の授業実践に対して大変な熱意を持ち、綿密な授業計画 (plan)、実施 (do)、事後に評価 (check)、改善 (act) の PDCA サイクルを繰り返されている。未だに訳読一辺倒の大学教員がいると耳にする中（なお訳読自体は授業テクニックの一つとして認められるべきで、一辺倒であることが問題と筆者は考えている）、授業テクニックのそれぞれに明確に狙っている効果をしっかりと考え、実践に臨まれている大学教員がどれほどいるだろうか。氏はその PDCA サイクルを「試行錯誤」と、大変謙遜なされた言い方をなされていたことも心に残る。

次に 2) の研究の話では、Levelt (1993) のスピーキング等の処理における語彙仮説モデルや脳神経科学的研究の知見を大変わかりやすくご紹介いただいた。筆者はコーパス関連の研究の成果の英語教育への応用を考えてきたが、プライミング現象は学習者の第二言語使用における特有のチャンクの関係や、英語使用者全般のコロケーションの生成にも繋がるものが読み取れて、大変興味深いものであった。言語使用の自動化には、1 語 1 語に訳語を考え、後に訳を与えられた言葉の前後をつなげる訳読方式ではなく、チャンクやコロケーションのような効率的に処理できる単位で脳内にストックし、さまざまなプライミングを無意識的に起こすことが必要のように感じる。最後の 3) のまとめの部分では、この関係の研究をさらに推し進め、説得力のあるデー

タと議論の蓄積を行うこと、換言すれば外国語教育研究の「インフラ整備」を行う必要性を強く主張なされていた。

お気づきの読者の方もいらっしゃるかと思うが、英語教育の発表や講演では、通例、まず基礎研究や理論の話があり、次にその研究成果や理論に基づく授業実践の話がなされることが多いが、今回のご講演は全く逆の順序である。筆者は講演中、ずっと不思議に思い、どのような意図だろうと考えていたが、後の懇親会でのお話しの際、この疑問は氷塊した。その理由は、私なりの言葉で述べさせていただければ、講演者である横川氏の教育に対する真摯な姿勢の表れ、まず自分の目の前の生徒に対して行う教育実践を大変重要視している姿勢の表れである。まず実践を行い、「失敗」した際には、その「失敗」をそのままにせず、「なぜ上手くいかないのか」、「どのようにしたら上手くいくのか」というテーマが生まれ、そのテーマに対して研究をなされ、再度実践に還る。まさに講演題目の副題、「授業実践と基礎研究のインターアクション」である。

外国語教育研究の「インフラ整備」には筆者も大変共感を覚える。確固とした「インフラ」がないままに、我々の教育研究は目に見えない個人内の「経験」のみを頼りとして行ってきた部分を否定できない。正直なところ、まだまだ多くのことがわかっ

ていないのが実情である。氏はスクリプトを渡して行う教育活動で目に留まった一文を挙げさせる”listener’s attention”という活動を紹介なされていた。「外国語教育研究のインフラ整備を」、その言葉にわれわれ英語教育者であるリスナーは注意を向けて、心に留めるべきであろう。

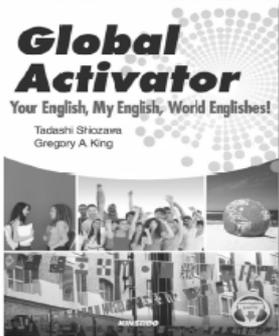
藤原康弘（愛知教育大学）

## 研究会報告

### 待遇表現研究会 (Politeness Research Group)

本研究会は、英語と日本語のコミュニケーションにおいて、対人関係構築・維持のためにどのように言語が使用されているかを解明することを目的としている。対人関係の在り方は、各言語文化の影響を大きく受け、日・英語間でかなりの相違が見られる。しかしそれにもかかわらず、日本の英語教育ではこの点はこれまでほとんど考慮されてこなかった。本研究会は、両言語で期待される対人関係の築き方を明らかにし、情報の伝達だけではなく、英語で誤解のない友好的な人間関係を構築できる英語話者を育成するために、どのような教育方法が可能であるかを考察している。

研究会は中部以外にも関東、関西支部か

	<b>Global Activator</b> Your English, My English, World Englishes! 大学生のためのグローバル時代の英会話
	「世界の英語」で体感する、グローバル時代のリアルな英会話 ネイティブスピーカーに加えノンネイティブスピーカーのバラエティに富んだ英語を取り入れました。世界の大学生たちの楽しくテンポのよい会話を軸に、リーディングやディスカッションなど多彩なアクティビティを用意しました。 塩澤正 / Gregory A. King 著 本体価格 ¥ 2,000 ISBN978-4-7647-4003-7
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-21 TEL 03-3263-3828 FAX 03-3263-0716 e-mail: text@kinsei-do.co.jp URL: http://www.kinsei-do.co.jp	
 <b>金星堂</b>	

らの会員も参加し、ほぼ2か月に一度の割合で開催している。会員は互いを研究分担者としながら、これまで継続して科研費を獲得してきた。それによって、10年以上にわたり日本語、英語、また両言語話者間の計80本以上40時間余りの会話データを収集・蓄積し、談話分析の手法でそれら进行分析している。

分析結果は、ほぼ毎年、JACET 国際大会でのシンポジウム、ワークショップ、ポスターセッション等で発表を行っている。また、International Pragmatics Conference (IPrA)や AILA World Congress などでも発表、議論を重ねてきた。2015年4月には科研メンバーがその成果を『日・英語談話スタイルの対照研究—英語コミュニケーション教育への応用—』(ひつじ書房)として出版した。そこでは対人関係維持の言語ストラテジーが単に表現の選択に留まらず、談話の運び、自己開示の方法、参加者間の発話の配分、聞き手の役割や行動等の多岐に渡っていること、日英間でかなりの違いが見られること、また、この点こそが英語で円滑なインタラクションを行う際の重要な鍵となっていることを明らかにした。今後は、それらの成果をどのように教育の現場での指導に結びつけるべきかという、具体的な方法論の確立を目指した研究を中心に進めていく予定である。

本研究会は、このような英語における対人関係構築のストラテジーの重要性が、学習者はもちろん、英語教師にもあまり重視されていない現状を憂慮している。しかし相手との良い関係を築くことができこそ真の国際人であるとの信念に基づいて、今後も微力ながら研究成果を発信していくつもりである。

副代表 大谷麻美 (京都女子大学)

## 会員著書紹介 1

津田早苗・村田泰美・大谷麻美・  
岩田祐子・重光由加・大塚容子 著

『日・英語談話スタイルの対照研究  
—英語コミュニケーション教育への応用』

ひつじ書房 2015年

本書は、日本語話者と英語話者の間のコミュニケーションについて、主に談話分析の手法を用いて、単に言語的な違いだけではなく、コミュニケーションスタイルの多様な違いに焦点を当てた研究である。分析対象は、母語話者間、日本語母語話者間、英語母語話者と日本語話者の異文化間の3種類で、いずれも3人の男性の間で行われた会話である。本書の構成は、研究の目的・概要の第1, 2章と、自己開示、応答要求表現と応答、他者修復、あいづち、話題展開スタイル、ターンと発話量の6つの観点から分析する第4~9章と、まとめと英語教育への応用の第10, 11章からなる。

本書は、これら6つの分析視点が、コミュニケーションスタイルを決定する要因になる語用指標となりうることを示した。選定した6つの語用指標が、それぞれの言語文化内で共有される contextualization cue となり、異文化間のコミュニケーションでどのように促進あるいは阻害要因になっているかを明らかにしたことが、本研究の最大の意義であろう。加えて本書は、今後、グローバル化が進み、ますます異文化の人々とのコミュニケーションが増加する際に、起こりうる情報伝達の課題・誤解などを生む不安感・人間関係構築の障壁を解決するために、研究書として高い価値をもつのはもちろんのこと、実践的な問題克服のヒントになる点で優れている。

拙稿筆者は、学習者の異文化に対する態度に強い関心があるため、最も興味を魅か

れたのは、第4章の日・英語の初対面会話での自己開示の相違点であった。自分の個人情報について初対面の相手にどの程度積極的に話すかは、経験知として日本人と英語話者には大きな差があると認識していたが、本研究によると、英語会話では、初対面でも自己開示が大きい傾向があり、それはトピックの掘り下げ方の違いからくることを明らかにした。さらに、自己開示は、相手との距離を縮め、アイデンティティーの構築に寄与し、話し手へのラポールを示し、会話を発展させる機能もあることを示した。この背景には、英語会話では自己開示が肯定的に捉えられるのに対し、日本語会話では自己開示があまり奨励されないことがあるという。また英語会話では、会話は参加者全員が作り上げるものという意識があるが、日本語会話では、熱心な聞き手としてふるまうこともある様だ。このような違いは、やはり自己アイデンティティーや文化的意識の違いから生まれるのではないかと考えた。

また、第3章のフォローアップインタビューは、各話者の主観的な部分の分析であるが、会話以前に、それぞれの話者が前提としている意識・態度・心理が、英語母語話者と日本語母語話者で異なることが明らかにされ、今後の自分の研究に大いに参考になった。

このように、本書は、談話スタイル研究の枠組みを超えて、いかにコミュニケーション力を育成するかの教育的研究にも大きく寄与するものであろう。最後に、いささか個人的な要望であるが、可能であれば、本書にもあったように女性の談話分析、日本人が話す機会が増加するアジア諸国の英語話者の談話分析、自己開示機能と談話量やターンの関係など、今後の研究の発展にも期待したい、と思った。

安達 理恵 (愛知大学)

## 会員著書紹介 2

田中春美・田中幸子 編著

『よくわかる社会言語学』

ミネルヴァ書房 2015年

本書は、編著者である田中春美氏、田中幸子氏に加えて、共著者として川村陽子氏、今村洋美氏、大石晴美氏が名を連ねていて、全員 JACET 中部支部所属会員である。また、本書は 1996 年に同じミネルヴァ書房から出版された田中春美、田中幸子両氏の編著である『社会言語学への招待』の後継版であると思われる。

本書は 14 の章からなり各章 5~7 の節に下位区分されている。各節は見開き 2 頁に収められている。珍しく注釈を側注形式としたので参照が見やすくなっている。本書が B5 版になったのは側注を採用するためと推測できるが、結果、書面が見やすく読みやすくなっているのは良い工夫と言える。

内容的には、社会言語学の領域をほぼ過不足なくカバーしていて偏重がなく、社会言語学の総合的な理解が得られる。一つの節に 2 頁しか与えられていないが極めてコンパクトに遺漏なく解説が行われているので十分な知識の獲得が期待できる。著者チームが内容に対して入念な検討と調整が行われた結果と推測する。

明記されていないが、14 章構成、網羅的な内容、分かりやすい解説等から、本書は大学での講義用教科書を念頭に置いて作られたと思われる。紹介者は長年「社会言語学」の講義を担当していて旧書『社会言語学への招待』を利用させてもらっているが、今後は新しい本書『よくわかる社会言語学』を利用させていただこうと考えている。大学の教科書としては最適な一つであると言える。

吉川 寛 (中京大学)

## 事務局より

◆ 2015年度春季定例研究会のお知らせ  
2015年度春季定例研究会を2016年2月20日（土）に名城大学天白キャンパスで行います。研究発表の締切りは1月5日（火）となっています。詳細はJACET中部支部ホームページをご覧ください。

◆ 新入会員のご紹介  
2015年6月から2015年11月までの中部支部所属新入会員は以下の方々です。（敬称略、入会順）  
阿部大輔（名古屋大学：院生）、Dunkley, Daniel（愛知学院大学）、吉岡明子、島内俊彦（小松短期大学）、永井正司（名古屋工業大学）、袖川裕美、福島美枝子（富山国際大学）、Lankheet, Krystal（北陸学院大学短期大学部）、Kaiser, Meagan（南山大学）、松家由美子（静岡大学）、木村麻衣子（武庫川女子大学）、野坂美紀（名古屋市立桜台高校）

◆ 2015年度第2回JACET中部支部総会報告  
12月12日に開催された第2回JACET中部支部総会で2016年度事業計画及び予算案・人事案が了承されました。

◆ 2016年度JACET国際大会ご案内  
第55回（2016年度）国際大会は2016年9月1日（木）～3日（土）に北星学園大学（北海道札幌市）にて開催されます。大会テーマは以下の通りです。  
「ボーダレス時代における英語教育をデザインする」  
Designing English Education in a Borderless Era

◆ 住所変更届提出のお願い  
支部会員みなさまに、紀要やNewsletterなどの郵便物をお届けできない事例が増えています。お手数ですが、転居の際には、JACET本部事務局と中部支部事務局の両方に、住所変更届をご提出ください。詳細は、以下のサイトをご覧ください。

・ JACET 中部支部ホームページ  
<http://www.jacet-chubu.org/>

◆ ニュースレターは会員の皆様のフォーラムです。ご意見、ご要望等は事務局までメールでお送りください。投稿も歓迎いたします。

### 掲示板

『JACET 中部支部紀要』第14号に掲載用の原稿（学術論文、研究ノート、実践報告、書評）を募集します。奮ってご応募ください。

締切： 2016年9月10日  
刊行予定： 2016年12月  
掲載料： 刷り上がり1ページにつき、  
1,000円の負担  
長さ： 論文15ページ、実践報告・  
研究ノート10ページ、書評  
5ページ程度  
問合せ： JACET 中部支部事務局

投稿規程など詳細は、ホームページや紀要最終ページでご確認ください。

中部支部紀要編集委員会

JACET 中部支部事務局  
〒470-0197 愛知県日進市岩崎町竹ノ山 57  
名古屋外国語大学 佐藤雄大研究室内  
E-mail: t-sato@nufs.ac.jp



### JACET-Chubu Newsletter No. 35

2015年12月20日発行  
発行者： 一般社団法人 大学英語教育学会  
中部支部 （代表）大森裕實  
編集者： 佐藤雄大 北尾泰幸 藤原康弘